

元NHKリポーター

後藤 佑季 さん

障がいのある人の可能性を、 もつと社会に伝えたい

2021年に開催された東京2020パラリンピックで、NHKリポーターとして活躍された後藤佑季さん。
子どもの頃からの努力家で、やりたいことに突き進む
エネルギーシユな姿勢の裏側を伺いました。

耳からの情報だけではない コミュニケーション

私は、鼓膜で受けた振動を電気信号に変える鼓膜の奥の内耳(ないじ)の一部である蝸牛(かぎゅう)に障がいがあります。

私の聴力は、ジェット機のエンジン音が近くで鳴り響いても、音が微かに聞こえる程度です。

現在、左耳には人工内耳を装着しています。その仕組みは、マイクで音を拾

い、電気信号に変えて頭の中の電極から発信され、聴神経を通して、脳が音として認識するというものです。

2歳半のころ聴覚障がいがあることが判明し、小学3年生の時に、人工内耳の装着手術を受けました。人工内耳装用の聞こえ方は、人それぞれです。私の場合は、音がぼやける(ぼんやりする)ことと、重なること、という難しさがあります。肉声は聞き取りやすいですが、電話などのスピーカーから聞こえる音は、正確に聞き取ることが難しい状態です。

日常生活や仕事では、皆さんから「聴覚障がいがあるとは分からない」と言われます。その理由は、聞こえる人の世界で生きるために、「話す・聞く」リハビリを重ねたからです。現在、私は様々な要素を組み合わせて音を聞き、理解しています。状況によりますが、たとえば耳から聞こえる言葉が4割、相手の唇の動きを読むのが3割、文脈から予測するのが2割、表情から察するのが1割という割合です。努力すればするほど障がいは見えなくなっていくきました。

負けず嫌いで努力を重ね、 小さな成功体験を積み重ねる

人が言葉を習得するのは、3歳までと言われてます。私は、2歳半で聴覚障がいがあったので、ギリギリでした。すぐに難聴幼児通園施設に通い始め、言葉を覚える訓練を受けました。両親はテーブルには『テーブル』と書いた紙を、壁には『壁』と書いた紙を貼り、あらゆるものには名前があることを教えてくれました。

また、本や絵本をたくさん読ませてくれましたが、今思うと読書を通じて抽象的な概念を理解していったのだと思います。音が聞こえにくい人に抽象的な言葉を説明するのは、すごく難しいと思いますが、両親が根気強く教えてくれたのだと思います。9歳の壁と言われる、助詞や助動詞

の意味や抽象的な言葉が理解できずにつまずいてしまう難聴の子どももいるのですが、私はつまずくことはありませんでした。また、子どもの頃に両親から「聴覚障がいがあるから止めておきなさい」と、障がいを理由に制限を受けたことはありませんが、それは、今の私の性格に大きく影響していると思います。

NHKのリポーターをしている時、様々な分野で活躍する障がいのある人やパラアスリートに取材をしましたが、共通していたのは、親からやりたいことに対して制限されてこなかったということでした。出来ないから止めなさいではなく、どのようにしたらやりたいことができるようになるのか。私の両親も、取材した人たちの親御さんも同じような考えでした。

私は幼少期からいろいろな体験をさせてもらっていたこともあつてか、活発な子どもだったと思います。スイミングスクールにも通いましたし、ピアノも習いました。どちらも聴覚障がいのある子どもにとっては一筋縄ではいかないものだと思います。スイミングでは補聴器を外さないといけないので、インストラクターとのコミュニケーションが難しいのですが、親が、「この子は唇の動きでコミュニケーションできます」と頼み、スクールが受け入れてくれました。ピアノは音の細かな違いが分からないのですが、弾くだけなら音程が分かるので、弾くだけなら音程が分かるので、様々な曲を弾ける楽しさがありました。

新しい泳ぎができるようになったり、新しい曲が弾けるようになる、など聞こえなくてもできるという小さな成功をたくさん経験して育ってきたと思います。

そうして、自分で努力した分、ちゃんと結果が返ってくることに喜びを感じるようになりました。勉強も、努力すれば結果が返ってくるので好きでした。

『見えない』障がいがあつても やりたいことができる社会に

大学の英語の授業で、シャドーイングができなくて苦労しました。教員から、「あなたは普通に話せるのに、なぜシャドーイングができないのか?」と言われ、私の聴こえ方の状況を説明しても理解されないという経験をしました。この経験から聴覚障がいは、『見えない』障がいだと感じることがありました。

大学3年になり、将来を考える中で、私が経験した『見えない』障がいのある人が生きやすい社会にしたいと思うようになりました。インターンの時期には、社会を企業の側から変えることができそうなコンサルティング系を志望していました。そんな時、NHKの東京パラリンピックに向けたリポーターの募集を目にしました。メディアを通して日本中に『見えない』障がいについて知ってもらえるのでは、と応募したのです。

私は、リポーターとしてパラアスリート



Yuki Goto

元NHKリポーター

1996年岐阜生まれ。慶應義塾大学在学中の2017年10月から2021年9月までNHKでリポーターを務め、東京パラリンピックでは主に陸上について伝えた(NHK在職中の2019年3月、慶應義塾大学を首席卒業)。先天性のPendred症候群により、生まれた時から両耳に聴覚障がいがある。現在は重度難聴で、左耳に人工内耳を装着。学生時代には陸上に励んだ。

やたくさんの方達に出会い、人の多様性を学び、彼らの持つ『強さ』を感じましたが、多くの方は学校や職場、社会で障がいのある人と接する機会が少ないように思います。また、私のような『見えない』障がいのある人は困りごとや助け方も『見えない』ため、時として誤解されたり理解されないこともあります。でも、年をとったときには耳も遠くなるかもしれないし、目も悪くなるかもしれない、認知機能も落ちるかもしれないなど、誰もが直面する可能性がありません。私だからこそ伝えられることを、これからも発信して、誰もが生きやすい社会になるきっかけを1つでも多く作れればと思っています。